【書評】

やまだようこ・サトウタツヤ・南　博文（編）

『カタログ　現場（フィールド）心理学―表現の冒険―』2001年　新曜社

小　島　康　次

『カタログ　現場（フィールド）心理学―表現の冒険―』（新曜社）は、やまだようこ編著『人生を物語る―生成のライフストーリー―』（ミネルヴァ書房）に続く、ナラティヴ・アプローチによる研究書第二弾である。前著が比較的少数の著者による理論的な考察を中心に据えた濃密な「語り」の書であるのに対して、本書は、より多くの著者によって様々な領域の人々の語るところを対象とした実践的な「語り」の書と言えよう。したがって、本書は是非とも前著と合わせて読まれるべきである。本書のもつ面白さは、それぞれの著者の語り口によっていることは言うまでもないが、前著を読むことで、その背景にある方法としての「語りに関する語り」が、ポリフォニーとして響きあうことによって、各論文の意味を増幅し、読み手をさらなる読みの冒険へと誘うからである。

書評という形式上、屋上屋を重ねることを覚悟で、本書がなぜ面白いのかを自問自答してみよう。

本書を順番に読み進む読者は少なかろう。評者も、折々にページをめくりながら、興の湧いた論文を初めのページにもどって読むというスタイルで、全論文を読み終えた。ページ数に比して楽々と読めたのは、通常の心理学論文と違って、著者たち自身が、描かれた世界の中のどこに位置しているかがわかり、時にその息づかいまでもがはっきりと感じられたからであろう。本書は、その意味で、著者たちの「冒険」譚として読むことができる。一般的な、堅固な方法によって実験室からフィールドへ渡ったのではなく、試行錯誤を繰り返し、時には失敗を逆手に取ったり、偶然の僥倖に助けられたりしながらも、勇気と工夫と創意によって、「方法論」という急流を渡りきった冒険の物語がそこにある。

しかし、そこには自ずと幾つかのタイプが区別されるようにも思われる。本書は、第Ⅰ部「人生と語り」、第Ⅱ部「現場とアクション」、第Ⅲ部「環境と移行」という三つのパートにわかれている。この区別の背後にある視座はどのようなものだろうか。

先年亡くなった文芸評論家、福田恆存の作品に『一匹と九十九匹と』（著作集第７巻、1957年）がある。これは新約聖書の「ルカによる福音書」にある「あなた方のうち、百匹の羊をもっている者がいたとする。そのうちの一匹がいなくなったら、九十九匹を野においても、迷い出た一匹を探すであろう。」（ルカ書、第15章４）という、イエスが語ったとされる言葉にかんする随筆で

ある。福田はこれを、政治と文学（あるいは宗教）の差異を人類最初に感取した精神を表すものだという。政治とは九十九人の正しき者の言説である。しかし、そこから迷出でる一人の人間を救うのは、文学（あるいは宗教）であるというのだ。

これは、二つの異なるタイプの語りについて述べたもののように見えるが、実は、語りがもつ矛盾した二つの側面を表す論述であるようにも感じられる。菅原和孝が「語ることによる経験の組織化」（『人生を物語る―生成のライフストーリー―』第Ⅴ章）で提起した問題は、語りが抱える本質的な問題であろう。語ることは、そのことによって初めて意味を生じさせる生成的な行為であると同時に、それによって、ことばで語られる以前の身体的な事実が隠蔽されたり、時に歪められたりする矛盾をはらんだ行為である。ここはその詳細を論じる場ではないけれども、福田の議論は、語りそのものにも同種の対立があることを示すもののように思われる。

そうしてみると、本書第Ⅰ部「人生と語り―生きた心理学の方法論を求めて―」（やまだようこ編）は、「一人の語り」の生成性を中心に据えているのに対して、第Ⅲ部「環境と移行―他者の世界へ旅してみること―」（南博文編）は、「一人の語り」から如何にして「九十九人の語り」が形成されるのか、あるいは、「一人の語り」が、「九十九人の語り」からどのような影響を受けるのかに焦点が当てられているように思われる。

第1章「いのちと人生の物語」（やまだ）はⅠ部の代表的な論文であり、かつ、本書全体を「一人の語り」を出発点とすべきであることの意義を示すメタ語り論（方法論）ともなっている。「一人の語り」の重さを直接的に扱った第6章「脳外傷者における物語としての自己」（能智）、第7章「障害者の人生と語り」（田垣）は、ともに障害者の語りを題材として、かれらが自己を語る語り口の重要性を明示している。第2章「母親と子どもとのやりとり」（岡本）と第3章「教室の談話分析」（當眞）では、語りの文脈（母子関係と教室場面）の相違による対話の特性について述べられている。第4章「移動と定着の人生を語る」（石井）、第5章「女性のアイデンティティー」（杉村）は、それぞれ異なるサブ・カルチャー（沖縄、女性）の中で、語りを通じて自己（アイデンティティー）を生成する物語を分析している。

それに対して、第Ⅲ部を構成する各章は、同じく語りをめぐる分析法をとりながらも、そこにある生活世界、言い換えれば九十九人の物語を描き出すことが意図されている。しかし、それが語りである以上、統計的な処理による数量化によって記述された平均的な世界ではなく、あくまで、そこに生きる人々の語ることばとふるまいにもとづく生きた世界を追体験することができるような仕掛けが張りめぐらされている。

第17章「まちの変化とNさんの生活世界」（南）は、とりわけ何の変哲もない現代のある町の再開発という文脈（むしろ無文脈と言うべき場面）を題材にして、そこにおける日常生活の変化が丹念に描かれている。それも一人の高齢者の語りを通じたものである点に、この論文と、その延長上にある方法に対する著者の矜持を読み取ることができる。フッサールは、日常的な世界あるいは生活世界を再認識する必然性について、次の点を強調している。日常的世界は、それ独自

の存在様式をもつもので、われわれが歴史・社会・文化を形成しながら、その中で行為を遂行する一つの自立的な層をなしていて、その空間における対象についての知を成り立たせている場であるということ。また、科学的知識や理論も、実証という目的のためには必ず感覚的あるいは知覚的経験の援用を要することから、科学者は常に使用可能な所与をともなった生活世界へと回帰する必然性をもつということである。

第17章が無徴の生活世界の描写を目指したとすれば、第20章「場所の語り－大学入学時の移行体験」（川野）は女子短大生の移行過程を題材として、新たな環境に対する単なる適応を超えた意味の構築のプロセスを対象の体験を通してとらえようとしている。ここでは、「九十九人の語り」の世界に「一人の語り」を通じて接近する方法論的な試みも提案されている。第21章「ハノイの路地―エスノエッセイと映像」（伊藤）は、ハノイという文化的にも空間的にも異質な場への移行が語られている。しかし、ここでも異文化を際立たせる場面をことさら探し出すのではなく、もっとも日常的な路地の風景と生活が題材となっている。第18章「1，2歳児の仲間関係をとらえる保育者の見方」（鹿嶌）と第19章「子どもの隠れる行為の劇学的分析」（苅田）はともに幼児の遊びをテーマとした生活世界の描写である。しかし、それだけに留まらず前者は、保育所における1、2歳児の仲間関係について、後者は幼稚園における遊びについて、それぞれ、子どもたちの心的リアリティーを描き出すことに成功している。第22章「実験室とフィールドのチンパンジー」（明和）は、これまで比較心理学として扱われてきたチンパンジーの心的世界にナラティヴ・アプローチで迫ろうという野心的試みである。この分野の古典には、すでにK．ローレンツという並外れたストーリー・テラーが存在する。また、最近では進化心理学というメタ物語も隆盛を誇っている。そうした派手なアプローチと一線をおく著者の冷静な挑戦は好感がもてる。

さて、本書第Ⅱ部「現場とアクション」（サトウタツヤ編）はどのように位置づけられるだろうか。このパートに収められた論文のいくつかについて、評者はもっともハラハラしながら読んだことを告白しておく。それは恐らく、このパートが「一人の語り」と「九十九人の語り」の緊張関係の上に成り立つものだからではないかと考える。

第11章「自白の信用性鑑定」（高木）を例にとろう。自白の信用性鑑定という、いわば、客観性を問題とするような文脈で、被疑者の語りそのものだけを唯一の客観的データとして、その真偽を鑑定する作業に、ナラティヴ・アプローチはどのように寄与できるだろうか。この高木らの果たした役割は、もっとも危うい冒険の一つだと思われる。法廷は、「九十九人の語り」を構成する場であろう。映画やテレビドラマでは、「一人の語り」（たいてい、被告が語る人生の悲劇等）が「九十九人の語り」を凌駕することがある。いや、それだからこそ、その筋書きは物語としての意味をもつ。実際の法廷は、被告個人の語りを、ある一つの「九十九人の語り」に再構成していくための共同作業の場であろう。弁護団をはじめとする法律関係者たちが心理学者に求めたのは、被告の語りそれ自体を実証的な語りの枠組みに組み入れることであった。もし、この前提を受け入れるならば、法律家たちを説得するには、語りそのものの特徴と客観的な証拠や被疑者の

生育歴・犯罪歴との関係を多くの例の積み重ねの中から見出すような実証的な方法を採るしか道はないのではなかろうか。こうしたジレンマをどのように解決するのか、今後の展開に注目したい。

第９章「住民運動と文化－小笠原における住民運動の多様な形態」（尾見）、第10章「精神病院のリロケーション－行動場面の自然観察」（高橋）、第13章「保育現場での異文化接触」（宮川）、そして、第14章「災害体験の記憶と伝達」（矢守）は、いずれも、日常の生活世界における語りをベースにしながら、いわばその裂け目である非日常の語りとの葛藤を通じて、そこから新たな概念を創造しようという意欲的な研究である。第16章「違和感分析－現場に居ながらにして現場に入り込む１つの方法」（サトウ）に詳しく述べられているように、これらのアプローチはエスノメソドロジーと親和性の高いものである。第12章「教室におけるアクション・リサーチ」（秋田）は、同じ生活世界の中に「公的場」という裂け目を見出して、男女の語り方の相違を明らかにした研究である。初めからジェンダーという窓から覗いて得られた結果ではないが（むしろそれだけに正当な方法として）、ジェンダー研究ともリンクする可能性をもつ研究であろう。

全体を俯瞰してみると、『カタログ　現場（フィールド）心理学―表現の冒険―』の著者達は、時に訥々と、時に能弁に、あるいは論理的に、あるいは巧妙なレトリックを用いて、自分自身が目で見、肌で感じ、頭で考えたことを読者に伝えるための表現を工夫していることが改めて伝わってくる。心理学の実験パラダイムを越えて、フィールドへ飛び出したことが冒険なのではない。心理学のことばを自ら破壊し、新しい表現のことばを創造することこそが真の冒険なのである。著者たちの勇気と工夫に敬意を表する。

（北海学園大学教授）